

# ウクライナ避難者支援のための情報共有会議 第 32 回

■日付：2025 年 12 月 23 日（火）18：30～20:30

■場所：オンライン（Zoom）

■主催：あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク

司会：土井佳彦（あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク コアメンバー）

## （1）各団体からの報告

### 【愛知県多文化共生推進室】（中村氏）

- ・ 避難民数：約 84 世帯 114 名（2025 年 12 月 1 日現在）
- ・ 支援策：生活一時金（1 世帯 20 万円、3 年目以降は 10 万円加算）を継続して支給。  
タブレット貸与・SIM カードの提供。  
日本語学習機会の確保など学習支援を実施。
- ・ その他：今年度は寄附物品としてアイスクリームを配布した。来年度も同程度の支援継続を目指し、予算調整中。

### 【名古屋市国際交流課】

#### （鶴飼氏）

- ・ 他団体と連携し、ウクライナ避難者支援を継続。
- ・ ガバメントクラウドファンディングを活用した支援は、今年度も同程度の実施を目指し内部調整を進めている。
- ・ ガバメントクラウドファンディングについて（加藤氏）  
12 月 1 日～2 月 28 日の期間、ふるさと納税制度を活用したガバメントクラウドファンディングを実施。現時点で 7 名、10 万円の寄付が集まっている。（目標金額 100 万円）返礼品は、ウクライナレストランギフト食事券、避難者制作の民芸品。寄付額が伸び悩んでいるが、ふるさとチョイスの HP から避難民を取材した記事の閲覧ができるのでぜひご覧頂き、避難民の様子を多くの方に知っていただくことで寄付に繋げたい。
- ・ 名古屋市内の避難民は 86 名。

### 【日本ウクライナ文化協会】（榎原アレクセイツェヴァナターリヤ氏）

- ・ クリスマス会開催（中部土木(株)協力）参加者 60 名以上（子ども含む）。ツリーには来年の希望を書いた紙を飾り、フォトスポットも設置。ウクライナの曲（Carol of the Bells）を避難者がサクソ演奏。ウクライナのクリスマス料理の提供。ウクライナの青い衣装のサンタクロースによるプレゼントなどが心のケアとなり、交流を楽しんだ。
- ・ 日本語クラスは約 15 名が修了。来月から新クラスを開始予定。
- ・ 個人寄付を活用し、高齢者向け支援や年末年始のプレゼント配布を予定。
- ・ 子どもの支援や相談支援も引き続き継続。

### 【日本財団】（経営企画広報部 ソーシャルイノベーション推進チームリーダー 神谷氏）

- ・ これまでのウクライナ避難民支援の取り組みをまとめた『ウクライナ避難民支援活動報告書 2022-2025』を作成。2026 年 1 月上旬頃に日本財団のウェブサイト上で公開予定。（→後日公開された。URL は右記の通り：[https://www.nippon-foundation.or.jp/wp-content/uploads/2026/01/wha\\_pro\\_sup\\_ukraine\\_13.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/wp-content/uploads/2026/01/wha_pro_sup_ukraine_13.pdf)）『わたしたちの考え』『国内支援の概要』『支援した避難民について』『避難民支援を通じて生まれた変化』をわかりやすく編集（当初 3 年間の想定が 4 年以上となり、生活支援事業の実績や成果、課題を後世に残すことを目的。）避難者本人のストーリーを紹介するコンテンツもある。ウクライナ語の原稿を翻訳し、ウェブ上で公開。行政や各団体と連携した助成事業の成果報告紹介もある。
- ・ ウクライナ避難者の子どもを対象に、寄付を原資とした応援金（1 人約 19 万円を支給）を教育費や学習教材等を目的としての支援を実施。（生活費の補填ではなく、将来に向けた学びを支えることが目的）クリスマス時期にはギフトカード等を同封した郵送も行った。
- ・ 今後の取り組みでは外国にルーツを持つ子どもの教育支援に重点分野とし、特に日本語教育の地域差解消を目的とした教材開発を進めている。本教材は学校現場での活用を想定し、2027 年 3 月に無償公開予定。

## 2. 年末特別企画について（趣旨説明）

- ・ 支援に関わってきた人や、避難者と直接関わりのある人が、それぞれの思いやエピソードを共有。関わる中で感じたこと、印象に残った出来事、今後必要だと考える支援を話し関わる人の輪を広げていきたい。

### 1 〈NPO 法人 U-CRANE 原田氏〉

- ・ 学生の立場から支援に関われる方法を模索し、日常的に活動。
- ・ 学生主体で運動会イベントを企画・実施し、避難者を含む幅広い世代が参加。リレー競技や、音楽・ダンスを取り入れた玉入れが特に盛り上がった。ウクライナでは学校行事としての運動会文化が少なく、日本式運動会の体験が文化交流の機会となった。一緒に体を動かし楽しい時間を共有することで、避難者を身近に感じ、平和や世界について考えるきっかけになった。参加者からは好評で、来年も運動会の継続や、新たな交流企画を学生と検討中。

### 2 〈生活クラブ生協〉片山氏・並川氏

#### 片山氏より

- ・ 今年から本会議に参加し、支援に協力。夏から9月にかけてカンパ活動を実施。約40万円の支援金が集まる。トラックを使用した物資の運搬支援にも協力。
- ・ 初めて避難者と直接関わった際、言葉の不安はあったが、翻訳アプリ等を活用し円滑にコミュニケーションが取れた。暑い中で一緒に作業を行い、国や言葉が違っても「同じ人間」として協力できたことを実感。印象的なエピソードとして、狭い搬入口に大きな荷物を皆で工夫して搬入し、成功した際にウクライナの方がガッツポーズをして喜んだ様子が心に残った。
- ・ 作業後に一緒に食事をしたことも含め、非常に貴重な交流の機会となった。
- ・ 今後も協同組合として、人と人とのつながりを大切にしたい支援（交流、料理教室など）を継続していきたい。

#### 並川氏より

- ・ 搬入作業では階段や狭い場所での対応が必要だったが、協力して乗り越えられた。
- ・ 支援は「一緒に行動すること」自体が大切だと感じた。
- ・ 避難者との交流を通じて、互いに前向きな気持ちになれた。（進行より）トラックによる運搬支援は、引越しや一時帰国対応などで大きな力となっている。継続的な運搬支援への協力に感謝。

### 3 〈名東高校（MCU）〉高橋氏、西田氏

- ・ 名東高校の生徒によるウクライナ支援グループ「MCU (Meito Connect Ukraine)」として活動。授業 (World Studies) の一環として、「ウクライナの方々に笑顔を届ける」ことを合言葉に地域とウクライナをつなぐ。（ウクライナ避難民のメンタル回復への貢献。高校生の立場から、周囲に現状を知ってもらう）
- ・ 印象に残った出来事は、9月の交流で一緒に食事をし、日本の若者文化（プリクラや加工アプリ）について話し、写真撮影を楽しんだこと。日本独自の文化を共有できたことが、双方にとって良い交流になった。

#### 〈主な活動報告〉

- ・ 12月4日～7日（4日間）に約50名の小学4～6年生を対象として地域の絵画教室（くじら図工室）を訪問。ウクライナに送るクリスマスカード作成企画を実施。作成前にウクライナや避難者の現状について説明。カードにはウクライナ語や文化的要素を取り入れ異文化理解を深めた。（チェルノブイリ救援中部など、多くの団体の協力を得て実施）
- ・ 若い世代がウクライナについて考えるきっかけづくりも、間接的な支援になると考えている。

#### 〈今後の予定〉

- ・ 募金活動；12月26日（金）11:00～17:00 星ヶ丘駅  
12月28日（日）9:00～12:00 藤が丘駅（チェルノブイリ救援中部と協力）
- ・ 交流イベント；1月12日（月・祝）食事会予定（心に残る交流の場となるよう詳細調整中）

### 4 〈個人ボランティア（名古屋市支援登録者）〉鳥居氏

- ・ 名古屋市の支援登録制度を通じて、東別院での交流会をはじめ物資運搬やイベント活動に継続的に協力。
- ・ 東日本大震災以降、災害支援に関わってきた経験があり、現在は家庭や仕事の制約の中で「無理のない形」

で支援に参加。

- ・ 過去にポーランドを訪れた経験などから、ウクライナへの思いを持っていた。運搬作業や現場支援では、初対面の日本人・ウクライナ人と協力する場面が多く、作業そのものが交流となり印象に残っている。言葉の壁はあるが身振りや雰囲気でのコミュニケーションが取れ、楽しい時間を共有できた。
- ・ 短時間・近距離・平日昼間などの限られた時間でも参加できるなど自分に取ってかわりやすい。今後も、可能な範囲で継続的に協力したい。
- ・ 家族（子ども）と一緒に参加できる交流イベントも、良い経験になっている。

## 5 〈コープあいち〉宇野氏

- ・ 2022年3月頃に、国際センターでのチャリティイベントの際に軽食の協力をいただけないかという依頼があり、ウクライナ避難者支援に関わるようになった。その際に、名古屋市の支援登録制度に登録、単発ではなく継続的な支援をするようになっていった。行政や他団体とのつながりが広がった。
- ・ 避難者が毎月手作り品を販売するマーケットに出展する際に、食事提供、物資支援などを継続。さらに、ネットワークが行っている「ししゅうの会」で食材を継続的に提供。避難者と東日本大震災の避難者、支援者と一緒に食事を作り、共に過ごす時間を大切に、心の交流につながっているとネットワーク事務局より聞いている。その他交流会等でも食事の支援を継続的にしている。
- ・ 物資輸送・引越し支援などでは、コープあいちが持っているトラックを活用して運搬支援に協力。洗濯機設置など、生活立ち上げに関わる具体的な支援も実施。生活クラブさんと一緒に避難者と食事をともにすることもあり、よい交流の機会になった。
- ・ 組合員への募金の呼びかけについて。宅配利用者の内、3分の1がチラシを見てくれたとして6万人、その10分の1の約6000人が募金に協力してくれた。こうした組合員の輪が広がることが大変うれしい。個人的には、募金は、チラシを通じてどれだけの人に気持ちを伝えることができたかの結果と考えている。関心の低下が懸念される中でも、情報発信を続けることは大事。組合員・利用者向けのチラシ配布や広報を通じ、少しずつ支援の輪が広がっている。特に、情報発信においては「何をどう伝えるか」「情報の中身」が、支援を広げる上で重要である。
- ・ 直接ふれあう機会（食事を共にすることなど）も支援の継続には大事。次の行動につながるきっかけになると感じている。
- ・ 本日のテーマ「支援の輪の広がり」について。個人情報問題も絡むので情報発信は難しい部分もあると思うが、避難者が「支援される存在」だけでなく、募金チラシに掲載したSさんのように「普通の一人の母親」であること、また、離れて暮らす家族を思い、日常を生きる一人ひとりの生活者であることを知らせていくことがまずは一歩であると思う。
- ・ 参考資料（広報誌特集記事、募金に協力いただいた組合員の声抜粋）を事務局に提供した。今後のみなさんの活動の参考になればと思う。

## 3. ブレイクアウトルームでの意見交換

### 〈グループ1〉

- ・ 生活クラブの活動がどのような経緯で広がっていったのかが話題となった。全国展開の団体でも、名古屋では特定の個人や団体との「つながり」が起点となって活動が展開してきた。
- ・ 人と人との関係性が、地域での支援の広がりを生む重要な要素である。
- ・ 中学生年代の子どもたちの進路や将来を自分の意思で選べない状況や日本語学習と学校教育の両立の難しさ、また、地域差による教材・支援体制の不足といった課題がある。（東京在住の日本語教室ボランティアの方より）
- ・ 日本財団による日本語教育・学習支援の中長期的な取り組みへの期待が共有された。

### 〈グループ2〉

- ・ 参加者6名で、自己紹介とウクライナとの関わりを共有した後、今後の支援の方向性について意見交換。防災分野との関わりを通じてウクライナ支援が広がっている実感がある。国際交流をきっかけに関わりが始まり、現在も継続的に参加している。
- ・ 新規参加者をどのように広げていくか、また困難を抱えている避難者の問題がより深刻化している現状に対し、行政支援とどう連携していくかが課題。
- ・ ロシア語が使える経験を活かし、通訳や支援に今後も関わっていきたい
- ・ オンライン日本語学習支援の経験や、寄附・物資支援が年々難しくなっている。
- ・ 他地域・他自治体での支援状況の調査を行っているが、今後の方向性について模索していると聞く。

### 〈グループ3〉

- ・ 世代を超えた交流の意義や、参加しやすい場づくりの重要性・小規模な地域単位での交流イベントを増や

すことの有効性を感じる。（東別院交流会に初参加したボランティア）

- ・ 若者（高校生含む）の参加が広がっていることが心強い。
- ・ 地元企業の参加や就労支援など相互理解につながる場を作ることへの期待。
- ・ 地元メディア（新聞・ケーブルテレビ）を活用した物資支援の取り組みを紹介。
- ・ 多様な立場の支援活動を直接聞くことが励みになり、非常に有意義。

#### 〈グループ4〉

- ・ 若年層の避難者（40代以下）に特有の悩みや思いを共有できる交流の場が必要ではないか。
- ・ 子ども同士の交流機会を増やすことへの要望。
- ・ ウクライナ現地とオンラインでウクライナ語の学習を継続している参加者から、現地の治安悪化や計画停電など厳しい状況が共有された。日本での支援の様子や会議の存在を現地の人に伝えることで、精神的な支えになっているとの報告。語学学習を通じた「個人対個人」のつながりが、継続的な支援や関心につながるとの意見。

#### 【ブレイクアウトルームの全体まとめ】

- ・ 人とのつながりが支援の広がり原点であることを再確認。
- ・ 世代別（子ども・若者・大人）や立場別に応じた支援・交流の必要性を共有。
- ・ 小さな関わりや個人レベルの行動も、支援の重要な一歩になるとの認識が広がった。